



高校生の原爆劇

第47号

被爆者の苦悩 演じ切る



「風の電車」の原爆投下前の一場面。少女たちには夢があった (撮影・岩田諒馬)

一番電車の女学生 モデル



原爆が投下された場面をシルエットで表現 (高2中川碧)

沼田高の演劇部は今年5月、「ピースアクションinヒロシマ」が開かれた広島グリーンアリーナ(中区)で「風の電車」を上演しました。戦時中の労働力不足の中、路面電車の運転士になり、原爆投下の日も電車を運転していた女学生の話を基にした創作劇です。

主人公の藤川夏恵は「神国日本のため」立派な運転士を目指して、7年前に原爆劇を取り入れた同部は毎年、ヒロシマを題材にするか、何度も話し合ってきた。顧問の松本誠司教諭(54)は「演劇は、見てもう一人に社会や地域の課題を考えてもらう役割があり、原爆劇もその一つだと説明します。」

夏恵の妹役を演じた高2の松陰未羽さん(17)は「高校演劇は人が動き、力強さを表現する唯一無二のもの。重たい気持ちではなく、使命感を持つ」と言い切ります。希望の光として一番電車が走る場面では、部員が一同に舞台上に集まり、体が大きく動かし力強く歌います。復興に向かう人々の様子が伝わってきて、心を動かされました。(高2中川碧)

沼田高 「風の電車」

「私たちの幸せな暮らしは過去の人の努力で成り立っている。平和を当たり前と思わず、世界へ広げるためにできることを考えてほしい」と河南さん。一番電車を運転する場面では、胸を張って前を見据えます。生き生きとした演技に、平和への強い思いを感じました。(高2上岡弘美)

主演 河南ひかりさん

戦争は「絶対だめ」



主役の高2の河南ひかりさん(16)は本を読んだり写真を見たりして、戦時中の人々がどんな物を食べ、何がはやっていたのかなどを調べて役作りをするそうです。史実を把握し、当時の人の気持ちに近づくためです。原爆劇に賛否両論が出る

中、河南さんは「続けたり方がいい」と言い切り。若い世代が戦争や平和に関心を持たないことに危機感を抱いており「戦争は絶対にだめなんだ」と伝えるためです。さらに部活動を通じ、シリアなどの紛争地域にも関心を寄せるように



一番電車が走る様子を演じる部員たち

演出 日野七海さん

傘や布揺らし躍動感



演出でもさまざまな工夫がされていました。演出チーフを務めた高2の日野七海さん(16)は「私たちのイメージがお客さまにうまく伝われば良い舞台になる。なるべく見ている人が想像しやすい演出を心掛けている」と話します。

オレンジや青など照明の色を変えて、朝夕の時間を表現。原爆が落ちた場面では、炎のように真っ赤な照明を背景に、電車内で亡くなった人の影が浮かび上がり、悲慘さが伝わってきて特に印象に残りました。劇中、みんなで歌う場

面では、傘を回したり布を揺らしたりして躍動感を演出。私も劇の中に入り込んだように感じました。「みんなで一つのことを創り上げる」という目的を共有し、練習を重ねることで、歌や演技の力強さが増すそうです。同世代が劇を通してヒロシマを伝えていることはすごいと思います。これからも引き継がれてほしいです。(高1岡田日菜子)

舟入高元顧問 伊藤さんに聞く



戦争知らない世代が追体験

約30年間舟入高演劇部の顧問を務め、ヒロシマの原爆劇の土台を築いた伊藤隆弘さん(88)は写真・佐伯区に、これまで歩み、10代が演じることに刺激を受けた生徒から「ヒロシマを題材にした劇を創ろう」という声があがった。初めて演じた原爆劇は「白いキャンパス」という作品。

約30年間舟入高演劇部の顧問を務め、ヒロシマの原爆劇の土台を築いた伊藤隆弘さん(88)は写真・佐伯区に、これまで歩み、10代が演じることに刺激を受けた生徒から「ヒロシマを題材にした劇を創ろう」という声があがった。初めて演じた原爆劇は「白いキャンパス」という作品。

原爆の日に上演した舟入高の「一輪の花の幻」(撮影・岩田諒馬)



原民喜の生涯を描く

半世紀近く原爆劇に取り組み舟入高演劇部。今年6日も、市主催の平和文化行事があった広島国際会議場(中区)で、全国から集まった観客の前に創作劇「一輪の花の幻」を発表しました。被爆作家で詩人の原民喜の生涯や苦悩を描きます。原爆がさく裂する場面では、地をほう女学生や、歩けなくなった男性が現れます。会場は瞬時に重苦しく張り詰めた雰囲気に包まれました。女学生の「助けて」という小さな叫びが、最前列で見た私は、自分が助けを求められているかのように感じました。民喜が存在意義を見いださず面では、心の叫びがビリビリと伝わり、息をのみました。「僕にはある」と何度も繰り返されたせりふが耳に焼き付いています。 (中3佐藤西)



主演 大野恭敬さん

生きる衝動 表現した

原民喜を演じる高2の大野恭敬さん(17)は「ヒロシマの史実だけでなく、1945年8月6日に生きていた人間そのものを見てほしい」と訴えます。妻の死で生きる気力を失い、被爆後に代表作「夏の花」を書き上げた民喜

は心の底から湧き上がるような声を出していました。演劇部員は、人間の葛藤や内面を表現するため、ふだんからダンスや運動をして体や心を鍛えるそうです。「全国大会で上位を目指すことで、原爆劇を多くの人に見てもらいたい」と大野さん。今後は、部の中心となる2年生として、新たな原爆劇に挑みます。(中2岩田諒馬)



水を求めて苦しむ被爆者を演じる部員たち

舟入高 「一輪の花の幻」

演出 仁井梨吏花さん

部員同士の議論重視

「原爆劇を受け継ぐことを誇りに思う」という高3の仁井梨吏花さん(17)は、部員同士で話し合いを重ね、ヒロシマをしっかり理解することを大切にしています。「原爆を知らない世代なりに真剣に史実と向き合い、演じたい」との思いがあ

からです。特に、自分たちより年下の世代が見に来ることを意識しているそうです。「私たちは戦争の一面を伝える媒体」と受け止めており、「ヒロシマの風化が進む中、次の世代に当時の人たちが感じていたことをしっかり伝

えられる媒体になりたい」と力を込めます。被爆者の死や、苦しみもだえるシーンは、命を軽率に扱わないよう心掛けています。仁井さんたちが全身全霊をかけて演技する様子を見て、これまで自分は、原爆や平和について取材し、記事を書く時、ここまで真剣に向き合ってきたらどうかと考えさせられました。(高2上岡弘美)